消えた国境

札幌市医師会
三浦俊祐・貴子皮膚科　三　浦　俊　祐

初めて陸路で国境を越えたのは1987年のことだった。ちょうど30年前、30歳の年。新婚旅行を兼ねて出席した、当時の西ベルリンでの国際皮膚科学会の折である。成田からフランクフルトまではルフトハンザ機だが、当時は東ドイツの上空を西ドイツ機が飛ぶことはできず、西ベルリンまでは英国航空機に乗り換えて移動した。

ホテルからベルリンの壁までは近く、歩いて見に行った。壁のこちら側は全面、落書きだらけだったのが印象的で、壁の向こうの世界のことは想像することもできなかった。

数日後、学会の合間を利用して、東ベルリンへの半日ツアーに参加した。チェックポイント・チャーリーと言われていた検問所を通るのは重苦しい経験だった。観光バスが東側に入った所で止められて、機関銃を抱えた国境警備兵が乗り込み、パスポートを入念にチェックする。彼らが降りてからも訳が分からないまま、延々とバスの中で待たされ、１時間位は経ったと思う。やっと通されて、美術館に向かったが、車中からの景色は古い石造りか、打ちっ放しのコンクリートの建物ばかりで、モノクロの世界に入り込んだようだった。壁の近くにとんでもなく巨大な建物があったが、ソ連大使館だと聞いた。東西ドイツの国境線上にブランデンブルク門があり、通り抜けはできないが、上の方はどちらの国からでも見える。門の頂に飾られた像は東を向いているので、写真に撮りたかったが、もちろん許されることではなかった。

それからわずか２年後、1989年11月９日の夜に壁は壊れた。東ドイツの政治局員シャボフスキーが記者会見で発表用資料の解釈を誤り、「国民は今すぐに国境検問所を通って出国できる」という大失言（もし故意ならノーベル平和賞を与えるべきだったと思うが、実際には統一後のドイツ政府に逮捕された）で、多くの東ベルリン市民が壁に殺到し、警備兵は発砲できなくなり、深夜までにすべての検問所は開放され、さらに壁が壊され始めた。当時、私と妻はアメリカ留学中だったが、TVのニュースで壁の上に多くの人たちが座り、所々で壁が壊されているさまを唖然としながら視ていた。そして、また必ずベルリンに行こうと思った。

2007年に20年ぶりにドイツを訪ねた。西でも東でもないベルリンで、ブランデンブルク門を旧西ベルリン側から歩いてくぐり、振り返って門の正面からの写真を撮った。旧西側よりは活気がなく、土産物を扱う屋台の一番の売り物は旧東ドイツ兵の制帽だったが、少なくとも街と人々はもうモノクロではなかった。カフェテリアでビールを飲んでいたら、隣のテーブルのオランダ人のお年寄りが話し掛けてきたので、前回訪問した時の暗かった思い出を話していたら、周りのドイツ人たちが黙ってしまったので、人生最大の失言の一つだったと反省している。滞在中に旧東ベルリン側にオペラを観に行った。軽妙なはずの「フィガロの結婚」だったが、場面を現代に置き換えて、しかも客席から笑い声一つ上がらない演出で疲れてしまった。幕間におやつを食べようと思ったが、売店にあったのは巨大なプレッツェルだけだった。ホテルまでは歩いて行ける距離だったが、時間が遅かったのでタクシーに乗った。若い運転手は返事もせずに、凄いスピードで走り出した。ただ、到着した時に少しチップを渡したら、期待していなかったのか、予想より多い額だったのか、狙撃兵のような目付きだった若者が、にっこり笑って「ダンケシェーン」と言った。

その後、さらに10年、特に欧米の先進国では壁は息を吹き返そうとしているかに見える。多くは自国民を出さないためではなく、他国民を入れないための壁だ。皮肉にも壁が壊れてから27年後の同じ日に、メキシコとの国境に物理的な壁を作ると言い続けた男が、アメリカ大統領選挙で勝利宣言をした。

結局の所、世界中のほとんどの人々、あるいはその祖先は生まれた土地でうまくいかず、移動していった「難民」なのである。新たな年を迎えて、壁が無くなるのが正しいことなのだと、誰もが思える方向に世界が動いていってほしいと願っている。